

さいたま川柳

第57回 さいたま誌上大会号

交風中夏



夏の稲

令和3年(2021年)
8月号 (No.741)

日川協加盟

巻頭言

川柳の音楽性について

「歌は世につれ世は歌につれ」と言われる。どの時代にもその時代に相応しい歌謡の世界があり、幅広く生活の場で推移してきた。古来、日本人の世界にも豊かな詩歌音曲の世界が存在した。よく承知の平安時代の「梁塵秘抄」にしても、当時は新鮮な詩型・内容・技巧であり、魅力的なものであったと想像される。であるが、現代ではそれらの朗詠は、限定された世界になっている。

ところで現代の詩文化に想いを掛ける人々は、文字の世界で記録に残すことに努めすぎていないだろうか。和歌でもあれ俳句でもあれまた雑俳であれ、専ら創作することとそれを記録し出版物として発行することに傾注していないか。本来的な座の文芸としての精神的な深みが稀薄になってはいないか。その中には前句附「川柳」の世界もあったのではないかと、言いたいのである。

川柳は俳句と異なり「切れ」は不要とされるが、川柳作句の場でも「切れ」を意識することがある。とするとそこには音楽性があることに等しい。ところが、川柳が披講される場では、「間」が全くない味気なさを感得する川柳人が多く居られると思いたい。文化の推移がせわしい時代ではあるけれど、人間の心を詠む詩文化に心を寄せる世界には、披講・朗詠の情感を期待したい。

願法みつる

日日是好

天と地に問い続けてる生きる意味
天変の世にしがみつく樹の根っ子
あの世では本を読んでる暇がない
ほれご覧座の文芸という遺物
芸人のやっと掴んだマの極意
銅鐸出土鳴る帰宅ベル

光年を飛ぶたかが百年
貰い泣きして歴史百彩
やさしい論語上ばかり見る
どんとゆこうぜ晴天を衝き